お　名　前	性　別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
伊田　小春	女　性	８９歳 H27.8.15 現在	１９歳	富岡

「豊橋空襲　　父のおにぎり」

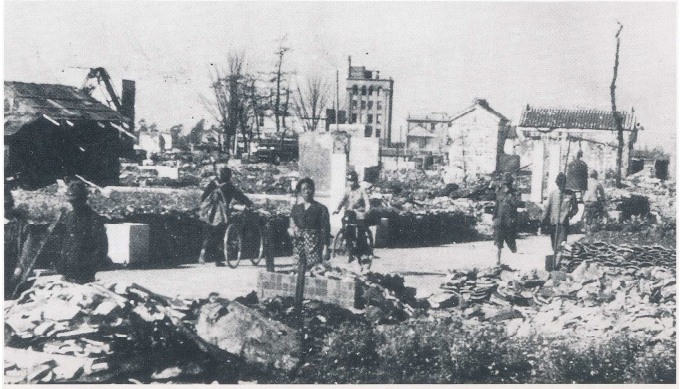
昭和１７年（１９４２年）３月，八名青年学校（富岡小学校に併設）を卒業した私は，同年４月豊橋の萱町郵便局に事務員として採用されました。そこは豊橋駅に近い松葉公園付近にあり，局長さんの自宅が郵便局になっていました。１階が局舎で２階が住宅になっていて，私は先輩のＹさんと二人で下宿をしていました。郵便局の仕事だけでなく，局長さんご家族のお世話や手伝いをしながら家族同然の生活をしていました。

２０年６月１９日の深夜，突然の空襲警報が鳴り響きました。眠っていた私はすぐ起きて身支度をしました。すぐに重要書類や大切な生活用品などを局舎の裏庭の防空壕に運び込み，蓋をして土をかぶせました。ふと見渡すと松山町方面も豊橋駅方面もまっ赤な火の海となっています。「ザー，ザー」と不気味な音を立てて，雨のように落ちる焼夷弾が見えます。私たちは，急いで豊川の堤防沿いに出て，吉田方を通って高洲町の局長さんの親戚の家をめざして逃げることにしました。菰口町あたりの道は避難する人でごった返していました。荷車に荷物を満載にして逃げる人や５，６頭の裸馬がすごい勢いで走っていくのが見えました。軍隊の馬だったのかもしれません。局長さんの奥さんは子どもを背負い，子どもの布団をかぶって田んぼのあぜ道を逃げて避難しました。後でその布団を見たら，焼夷弾が振りまいた油で真っ黒くなっていました。

空襲はとても長い時間続き，何度も何度も焼夷弾が投下されました。豊橋駅から花田町方面なのか，広い範囲で広がった火は何時間も市街地を焼き，暗やみを赤く染め続けました。東の空が明るくなり始めた頃，やっと郊外の親戚の家にたどり着きました。やれやれひと安心と息をつくと，疲労と眠気でついうとうとと眠ってしまいました。

「小春，小春」，誰かが私の名前を呼んでいます。目を開けてみると，何と実家の父の顔が目の前にありました。いつの間に訪ねて来てくれたのか，びっくりでした。一鍬田の実家では，ラジオのニュースで豊橋の空襲を知ったそうです。大急ぎでにぎり飯を作り，そうめん箱にいっぱい詰めて持ってきてくれたのです。避難していた親戚の人たちも大喜びです。白米のおにぎりでした。みんな泣きながら握り飯をむさぼりました。こんなにありがたく，おいしいおにぎりは初めてでした。いつも親を困らせていた私のために，夜明けを待たずに家を出て，２０㎞あまりの道のりを自転車で届けてくれた父の姿に，涙にむせぶばかりでした。

翌々日の２１日，焼け跡を訪ねてみると見渡す限りの焼け野原，豊橋駅も駅舎が焼けて骨組みがポツンと立っているだけです。街並みのほとんどの建物は焼きつくされていました。戦争の恐ろしさを改めて感じさせられました。念のために，局舎の裏庭の防空壕を掘り返してみると，埋めておいた重要書類や他のものも熱さに耐えて無事だったことが分かりました。ほっと胸をなでおろしました。ただ，新家の人が仕込んでおいた四斗樽いっぱいの味噌が，まだぶつぶつと煮えたぎっていたのには驚きました。


空襲直後の豊橋市札木町付近：東三河の 100 年より

○　下宿先の軍人さんのこと

私たちの下宿先の２階には二人の軍人さんが下宿しておられました。勤務地は，大崎島にあった豊橋海軍航空隊（昭和１８年４月発足）です。毎朝５時には「時間ですよ。」と呼びに行くのが私たちの日課でした。初めのうちは搭乗員の訓練基地になっていましたが，昭和１９年２月に実戦部隊の基地となり，マリアナ方面へ出撃を繰り返し行い，犠牲者も出るようになりました。

昭和１９年のある日のことです。下宿していた軍人さんが玄関先で，「局の上空を３周して旅立ちます。見上げてください。」と言われて出かけられました。待っていたところ，夜になって本当に飛来してきました。低空飛行でしたが，暗くて顔は見えませんでした。お別れの合図なのでしょうか，翼を左右に振りながら南方へ向かって飛び去っていかれました。軍人さんの無事を祈り続けました。

下宿していた軍人さんで，二度と宿には戻って来られなかった方も何人かおみえになります。低空飛行をされた軍人さんも，その後の無事を確かめることはできませんでした。

○　郵便局の仕事のこと

萱町郵便局の従業員は，局長さんの他に６名いました。通勤者が４名で，下宿していたのが私とＹさんの二人です。下宿していた私たちは，仕事以外に局長さん家族のお手伝いもしていました。Ｙさんは食事の準備とお手伝い，私は子守りや買い物などを受け持っていました。また，奥さんが営んでいたタバコの小売店の仕事も手伝いました。乳母車を押して，小田原の専売局まで仕入れに通いました。タバコを売るのも１日に何個と制限されており，毎朝５時に窓を開けると大勢の人が並んで待っていて，またたく間に売り切れてしまいました。仕入れの際は，

「ゴールデンバット」の包装用の銀紙を回収し，しわを伸ばし空き箱を添えて専売局に返納することになっていました。

本業の郵便局の仕事も忙しく，勤務時間外で夜業などをすることもありました。萱町郵便局は，豊橋市の中で預貯金の扱い量は２番目に多い局でした。豊橋は軍都の町でしたが，生糸の産業がさかんでした。管内には乾繭の事業所があり（国内で豊橋と群馬県富岡の２ヶ所のみ）生糸の相場関係の取引電報の利用も多く，窓口で受け付けた電報を本局へ送信する際，宛先の局名調べが大変でした。

○　戦争のこと

私の兄（長兄）は豊川海軍工廠に勤めていましたが，当日は夜勤明けで運よく助かりました。もう一人の次兄はビルマに出征し，終戦後もなかなか帰ってきませんでした。次兄は無事でいるのか戦死したのかも分からず，我が家では終戦という感じがありませんでした。しばらくしてから突然兄から便りが届きました。敗戦で帰国した兄は，病気（マラリア）のためそのまま豊橋の陸軍病院に入院していたことが分かりました。病院生活を続けるうちに徐々に回復し，マラリア再発後遺症の悩みを持ったまま復員したのです。ようやく我が家も平和になりました。昭和２０年の秋になってからのことです。

戦争になれば，否応なしに家族全員が戦争に巻き込まれていきます。直接戦地に行くことだけが戦争ではありません。送り出す家族も，銃後のふるさと守る人も，すべての国民が戦争に巻き込まれてしまうのです。

戦争はもうこりごりです。子どもたちが二度と戦争に巻き込まれないように，平和を守り続けなくてはいけないと強く思っています。

月日	戦災場所	罹災世帯	死者
１月９日	東田町西脇・牛川町南台	33	0
２月15日	向山町伝馬	115	10
３月４日	多米町	0	0
３月25日	向山町池下・牛川町野川	29	0
４月15日	小池町・柳生町	45	8
４月30日	山田町・南栄町	43	8
５月19日	花田町中郷・小池町	108	5
６月19日	市街地一帯	１万7019	624

豊橋空襲の被災地域　中日新聞記事 2015.6.16 より